

てくるのではないかと期待しているが、未だ道半ばの感がある。[10]

もう一つの重要な点は、被災者の話をよく聴くことではないか、我々はその努力をあまりして来なかったのではないかと、ということであった。そのことを思い知らされたのは、上記の震災ダイアグラムに利用される情報の殆どが行政やマスコミから発信されたもので、地震の発生でどれほど怖い思いをし、被災現場で何が起り、今どのような困難を抱えているかといった被災者側からの情報発信が極めて少ないことであった。確かに、被災者が当面困っている問題を解決するのは行政の仕事かも知れないし、被災者と行政の間を繋ぐのがマスコミの役割かも知れないが、だからと云って、夫々の分野の専門家・研究者が被災者の話を何も聴かなくても良いことにはならないのではないかと、とりわけ長期的視野に立った問題解決の緒だけは研究者でないと突破できないのではないかと考える次第である。

兵庫県南部地震の際には随所に大きな問題が発生したことに気を取られて、被災者の声に耳を傾ける努力が不足していたことを反省しなければならない。確かに、余震観測や微動測定も重要であったが、その合間にも被災者から話を聴くことはできたはずであった。それから10年後に発生した2005年福岡県西方沖地震の時には、新築マンションの非構造部材に被害が発生し、管理費の積み立ても充分でなく地震保険にも加入していないといった状況で、何度も被災者の話を聴き解決への努力を試みようとしたが、現実には甘くなかった。折しも地震直後に姉齒事件が発生したこともあって、建築業者・売り主とエンドユーザーの間には不信感が渦巻いており、建築基準法に違反していないので補修義務はないとする建築業者や、紛争には係わりたくない地方自治体や建築関係団体、被害への対応が不誠実であるとするエンドユーザーの間の溝は未だに埋まっていない。福岡の事例で不思議だったのは、被災したマンションが殆ど2000年以降の新築物件ばかりだったことである。近い将来に東京首都圏が同程度の直下地震に見舞われることを想定した場合、同種の問題は夥しい数のマンションで発生しそうで非常に心配である。このような建築紛争の問題解決には、一つには事例収集が先決であり、社会の合意形成とそれに付随した法的整備が必要となるが、道のりはまだまだ遠いとの印象である。この問題に関して最近最も衝撃を受けたのは、マンション建築の限界とも思われる避難階段を持たない棟を連結する事例(図10)の存在である。

何故このような事態にまで立ち至ったのか、建築学界・業界の関係者は真摯に受け止めてみる必要があるように思われる。

最後に、すでに述べたような聞き取り調査型の研究方法には利点も多いが、まかり間違うと大きな勘違いをしてしまう危険性があり、つい最近になってそのような事例に二つも出会ってしまった。一つは1978年宮城県沖地震で被災した高層マンション(写真1)の非構造被害に関して、偶々仙台で乗り合わせたタクシー運転手から聴かされた「修理費用を巡る民事裁判の結審まで10年を費やし、結局、施工業者・管理組合・住民の3者で等分に負担することになった」との話があった。この話をずっと信じていたが、前述の福岡での被災事例とも密接に関係するので、昨夏の仙台での建築学会の後で思い立って仙台地裁・河北新報・当該マンションに確認してみた。その結果は意外なもので、マンションの管理組合が中心となって施工業者と折衝し、修理費用の殆どを施工業者が負担することで解決しており、裁判には至らなかったことが判明した。もう一つは福井地震で全壊した大和デパート(写真2)に関する事で、

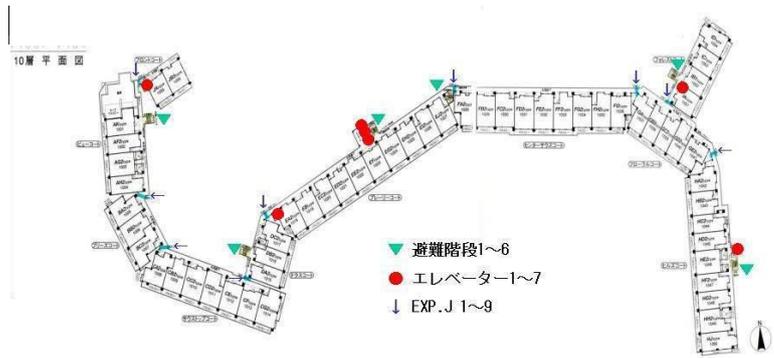


図10 エキスパンション・ジョイントで10棟が電車のように連結された新築マンション

最後に、すでに述べたような聞き取り調査型の研究方法には利点も多いが、まかり間違うと大きな勘違いをしてしまう危険性があり、つい最近になってそのような事例に二つも出会ってしまった。一つは1978年宮城県沖地震で被災した高層マンション(写真1)の非構造被害に関して、偶々仙台で乗り合わせたタクシー運転手から聴かされた「修理費用を巡る民事裁判の結審まで10年を費やし、結局、施工業者・管理組合・住民の3者で等分に負担することになった」との話があった。この話をずっと信じていたが、前述の福岡での被災事例とも密接に関係するので、昨夏の仙台での建築学会の後で思い立って仙台地裁・河北新報・当該マンションに確認してみた。その結果は意外なもので、マンションの管理組合が中心となって施工業者と折衝し、修理費用の殆どを施工業者が負担することで解決しており、裁判には至らなかったことが判明した。もう一つは福井地震で全壊した大和デパート(写真2)に関する事で、



写真1 1978年宮城県沖地震で被災した仙台市内のマンション



写真2 福井地震で被災した大和デパート

これも偶々金沢で開催された建築学会の際に大和デパート本店の守衛さんから聴かされた話は「震災の時は福井に勤めていた。地震当日はデパートは休館日で買い物客は居なかった。屋上では従業員の職場集会が開かれており、慌てて階段を降りようとした人が怪我をした。」というものであった。これらもつい最近「買い物客の殆どが圧死した」と専門書に書かれているとの情報を得て、調べ直してみる事となった。これには当のデパート側でも驚いて社史や当時の従業員名簿を提供して下さった。自分でも当時の新聞記事を再確認し「全壊致しましたが人命には損傷なく」という震災見舞御礼の新聞広告を新たに発見した。デパートの社史によれば、「おりから従業員大会で全員が6階に集まっていたので、はからずも全員125名一致の行動がとれ、怪我人を少々出しただけで全員脱出に成功した」とのことであった。何と125名の方があの崩壊建物の中に居たのである。また当日は休館日ではなく、夕方5時の閉店までは買い物客が居たはずで、地震発生までの時間は僅か10数分という際どいものであったらしいことも判った。昨年末には体験者の数人と面談するところまで漕ぎ着けたが、震災から60年が経過し関係者の皆さんは80歳以上ということで詳細はよく判らなかつた。ただ一人の方は、従業員用の階段を伝って円滑に避難できたので、地震直後には建物は写真で見ると壊れてなかつたのではないかと、忘れた傘を取りに2、3日後にもう一度6階まで行ってきたと、大変気になることを話しておられた。

7. おわりに

以上、この35年間に会った研究上のいくつかの『衝撃(ショック)』を中心にお話させて頂いた。最後は尻切れトンボの感があるが、これからの残された時間の幾分かは、少しでも多く地べたを這いずり回り、被災者やエンドユーザーから生の声を聴き取って、その裏づけをしっかりと取りながら研究にフィードバックしてゆく努力をしてみたいと考えているところである。今日まで大変多くの先生方のお世話になってきた。恩師の小林啓美先生はもとより、金井清先生・表俊一郎先生・田治見宏先生・大沢胖先生・鳥海勲先生・谷資信先生・藤本盛久先生・嶋悦三先生・太田裕先生など大先生方は皆さん個性的魅力に溢れておられ、分け隔てなく若い研究者を励ますのがお上手で、それらの一言一言がどれだけ救いになったか知れない。自分もかくありたいと願ってはいるものの、とても誰にでもできることではないと思ひ知るようになった。

研究室を持たせて頂くようになってからは、秦瑤子さん・佐間野隆憲さん・山中浩明さん・栗田勝実さん・元木健太郎さん達にそのつど助けられ、その折々の学生諸氏と苦楽を共にしてきた。誠にありがたいことで、教師冥利に尽きるとはこのことだとつくづく感じている次第である。すでに小林啓美先生や金井清先生を失ってしまった寂しさ・心の空虚感はまだまだ埋められそうにないが、大先輩方と若手研究者を繋ぐ橋渡し役としての立場は、これからも大切にしたいと考えているところである。

最後に、このような晴れがましい場所をご準備くださった大町達夫・翠川三郎・大野隆造の諸先生はじめ、人間環境システム専攻と都市地震工学センターの先生方・スタッフの皆さんに深甚なる感謝を申し上げたい。

最後の最後に、この研究談話会にご出席くださった皆様方に心からの感謝を申し上げ今後益々のご発展をお祈りしつつ、お話を終えさせて頂きたい。

参考文献

- [1] 大沢胖[研究代表者](1972)：1968年十勝沖地震における八戸港湾の強震記録と地盤特性，文部省科学研究費(特定)「構造物災害に対する地震動特性の研究」
- [2] 首都圏基盤構造研究グループ(1989)：夢の島人工地震実験資料集
- [3] 小林啓美[研究代表者](1978)：長大構造物の地震動災害とその防止に関する研究，文部省科学研究費自然災害特別研究研究成果，自然災害科学総合研究班
- [4] 瀬尾和大[研究代表者](1993)：長大構造物の耐震安全性に関わるやや長周期地震動の発生機構とその予測手法の研究，平成4年度科学研究費補助金(一般研究A)研究成果報告書
- [5] Kobayashi, H., K. Seo, S. Midorikawa, and S. Kataoka(1986)：Report on seismic microzoning studies of the Mexico earthquake of September 19, 1985. Part 1. Measurement of microtremors in and around Mexico D.F., Tokyo Inst. Tech., pp.1-98
- [6] Kobayashi, H., K. Seo, and S. Midorikawa(1986)：Report on seismic microzoning studies of the Mexico earthquake of September 19, 1985. Part 2. Estimated strong ground motions in Mexico city due to the Michoacan, Mexico earthquake of Sept.19, 1985 based on characteristics of microtremors., Tokyo Inst. Tech., pp.1-34
- [7] 瀬尾和大(1989)：微動観測とその工学的利用—メキシコ・アメリカの事例から—，日本建築学会第17回地盤震動シンポジウム，pp.83-90.
- [8] The 4th International Conference on Seismic Zonation, Vol.II, Stanford Univ. (1991)
- [9] 瀬尾和大[研究代表者](1998)：長大構造物の耐震安全性に関わるやや長周期地震動の特性予測に関する研究—M8級南関東地震で予測されるやや長周期地震動の特性評価とその問題点—，平成6～8年度科学研究費補助金(基盤研究A)研究成果報告書
- [10] 瀬尾和大(2007)：都市の震災，シリーズ<都市地震工学>7，大野隆造編 地震と人間，朝倉書店，pp.1-35